

戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」 ④

—青森県選出の国会議員像—

藤 本 一 美

〈総目次〉

- I. 戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」① (『専修法学論集』第127号)
- II. 戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」② (『専修法学論集』第128号)
- III. 戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」③ (『社会科学年報』(専修大学社会科学研究所))
- IV. 戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」④ (本号)

I. 竹内黎一と山内弘

- 1. はじめに
- 2. 竹内黎一
 - ① 出生・経歴
 - ② 衆議院議員
 - ③ 科学技術庁長官
 - ④ 政治家「竹内黎一」
- 3. 山内 弘
 - ① 出生・経歴
 - ② 県議会議員
 - ③ 衆議院議員
 - ④ 政治家「山内弘」

4. おわりに

〈注〉

*参考文献

II. 津島雄二と関晴正

- 1. はじめに
- 2. 津島雄二
 - ① 出生・経歴
 - ② 大蔵官僚

- ③ 衆議院議員
- ④ 厚生大臣
- ⑤ 政治家「津島雄二」

3. 関晴正

- ① 出生・経歴
- ② 教員・日教組
- ③ 市会議員・県会議員
- ④ 衆議院議員
- ⑤ 政治家「関晴正」

4. おわりに

〈注〉

*参考文献

I. 竹内黎一と山内弘

1. はじめに

竹内黎一は、1926年8月18日、青森県の黒石町に生まれた。旧制青森中学校、および旧制弘前高等学校を経て、東京大学経済学部を卒業した。1948年、毎日新聞社に入社、国会担当のキャップを務めた。その後、運輸大臣秘書官に就任、1963年の衆議院・総選挙では、青森県知事に転身した父・俊吉に代わり青森旧第二区（定数3）から無所属で出馬、最高得点を獲得して初当選した。

竹内は当選後、自民党に入党、元外務大臣の藤山愛一郎が率いる「愛正会」に所属した。藤山派は解体したものの藤山に寄り添い、1976年に藤山が政界を引退するまで、藤山派議員を貫き通した。その後、無派閥を経て「木曜クラブ（田中派）」に入会した。この間、外務政務次官、経済企画政務次官、衆議院外交委員会・委員長、および環境委員会・委員長などを歴任、1984年、第二次中曽根改造内閣の下で、科学技術庁長官に任命され、念願の初入閣を果たした。

しかし、竹内は1990年の衆議院・総選挙で初めて落選する。その後、

1993年の衆議院・総選挙で返り咲いたものの、1996年の衆議院・総選挙では、比例東北ブロックに回されて落選、政界を引退した。竹内は、2000年、政治的功績を認められて、勲一等旭日大綬章を授章している⁽¹⁾。

竹内は通算すると、衆議院議員を十期30年も務めあげ、その間、青森県旧第二区において、田沢吉郎・衆院議員とともに、津軽二大派閥の一方の領袖として、いわゆる“田竹時代”を築き、多くの首長や県議、市町村議を擁して県政治をけん引、県政界に大きな足跡を残した。1973年には、自民党県連会長に就任している。政界から引退した後、2015年9月5日、弘前市内の病院で多臓器不全のため死去、享年89歳であった⁽²⁾。

一方、山内弘は1929年2月22日、青森県中津軽郡相馬村（現・弘前市）に生まれた。山内は、1945年、旧制弘前中学校（現・青森県立弘前高校）を卒業、通信省弘前郵便局に勤務、全通労働組合弘前支部副委員長、全電通労働組合弘前支部委員長を経て、弘前地方労評議長に就任した。1967年、県議に出馬して初当選、これを通算四期16年務めた。またこの間、日本社会党青森県本部執行委員長を五期務めている。1990年の衆議院・総選挙では“反核燃”を訴えて、社会党公認で青森旧第二区から出馬・当選、これを一期務めた。だが、1993年、衆議院・総選挙では落選、政界を引退した。息子の山内崇も、元青森県議会議員で、2011年には、県知事選挙に立候補している。2006年6月30日、多臓器不全により逝去、享年77歳であった⁽³⁾。

本章では、青森県の保守勢力を代表する政治家の一人として自民党の竹内黎一を、また、革新勢力を代表する政治家の一人として社会党の山内弘を取り上げる。竹内は、青森旧第二区選出の衆議院議員として君臨、その間、「田竹時代」の領袖として活躍した。一方、山内の方は、電通労組弘前支部・委員長として組合活動に尽力、県議四期を経て、衆議院議員を一期務め、社会党員として反核燃を強く訴えた。両者は、青森旧第二区から出馬して、1990年2月と1993年7月の衆議院・総選挙では議席を巡って戦っている。1990年の時は、山内が制して当選、竹内は落選した。一方、

1993年の衆議院・総選挙では、竹内が返り咲き、山内は落選した。本章では同時代を生き抜いた、竹内黎一と山内弘の出生、経歴、および選挙戦などを中心に政治家としての足跡を検証する。

2. 竹内黎一



竹内黎一（1926年8月18日～2015年9月5日）

〈年表〉

- ・1926年8月18日 青森県黒石町に生まれる。
- ・1940年3月 旧制青森中学卒業。
- ・1944年3月 旧制弘前高校卒業。
- ・1948年3月 東京大学経済学部卒業。
- ・1948年4月 毎日新聞社・入社。
- ・1963年9月 運輸大臣秘書官に就任。
- ・1963年11月21日 衆議院・総選挙に出馬・初当選。
- ・1967年1月29日 衆議院・総選挙に出馬・当選（二期目）。
- ・1969年12月27日 衆議院・総選挙に出馬・当選（三期目）。
- ・1970年12月 外務政務次官に就任。
- ・1972年12月10日 衆議院・総選挙に出馬・当選（四期目）。
- ・1973年1月 自民党県連会長に就任。
- ・1976年12月5日 衆議院・総選挙に出馬・当選（五期目）。
- ・1976年12月 衆議院外務委員会・委員長に就任。
- ・1979年10月7日 衆議院・総選挙に出馬・当選（六期目）。
- ・1979年11月 自民党経理局長に就任。
- ・1980年6月22日 衆議院・総選挙に出馬・当選（七期目）。
- ・1982年12月 衆議院外務委員会・委員長に就任。
- ・1983年12月18日 衆議院・総選挙に出馬・当選（八期目）。

- ・ 1983年12月 衆議院環境委員会・委員長に就任。
- ・ 1984年11月21日 科学技術庁長官に就任。
- ・ 1986年 7月 6日 衆議院・総選挙に出馬・当選（九期目）。
- ・ 1990年 2月 18日 衆議院・総選挙で落選。
- ・ 1993年 7月 18日 衆議院・総選挙に出馬・当選（十期目）
- ・ 1996年10月20日 衆議院・総選挙で落選。
- ・ 1998年 衆議院議員在職25年表彰。
- ・ 1999年12月 政界を引退。
- ・ 2000年 勲一等旭日大綬章。
- ・ 2015年 9月 5日 死去・享年89歳。

出典：『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、939頁、『東奥日報』2015年9月6日、「経歴」『Reich Takeuchi プロフィール竹内黎一』〔竹内黎一を励ます会、1985年〕。

① 出生・経歴

既述のように、竹内黎一は1926年8月18日、衆議院議員や県知事を歴任した竹内俊吉の長男として黒石町で生まれた。旧制青森中学、旧制弘前高校を経て、東京大学経済学部を卒業。毎日新聞社に入社、国会担当キャップとなる。その後、運輸大臣秘書官を経て、1963年11月、衆議院議員の座を捨てて知事に当選した父・俊吉に代わり、黎一は青森第二区で無所属から出馬して5万1,306票を獲得最高点で当選、政界へデビューした。最高得票を得た要因は、俊吉知事による陰と陽から支援があり、多くの市町村長を含む竹内後援会の積極的な運動が功奏し、父の主力地盤であった西郡での大量得票が大きい。当選後、自民党に入党した⁽⁴⁾。

竹内黎一は以後、総選挙で9回連続当選を果たした。だが、1990年2月18日の衆議院・総選挙では、6万5,555票獲得したものの、初めて落選するという恥辱を味わう。自民党の木村守男や社会党の山内弘に票を食われたのだ。しかし、1993年の総選挙では、竹内は7万6,436票を獲得して返り咲いた。ただ、竹内は1996年の総選挙で、新しい小選挙区比例代表制のもとで、田澤吉郎とともに比例代表東北ブロック第15位に回されて落選、その後政界を引退した⁽⁵⁾。

竹内の入閣はかなり遅い。1984年11月31日に発足した第二次中曽根内閣の下で、科学技術庁長官に就任した。58歳に達していた。これまで竹内は、衆議院議員に当選すること8回、外務省、経済企画庁の政務次官をこなし、また外務委員長、環境委員長にも就任、内閣改造の度に入閣リストに挙げられていた。竹内は衆議員時代、いわゆる「社労族」として高く評価され、また自民党の経理局長、および同党県連会長などの要職を歴任していた⁽⁶⁾。だが、毎回入閣を逃がしていた。それは、長らく藤山派に所属し、自民党主流派から外れていた、からであろう⁽⁷⁾。

竹内は科学技術庁長官に就任した一方、旧総理府原子力委員会の委員長も兼務、原子力船「むつ」の後始末をし、核燃料サイクル施設の立地基本協定に携わった。こうした功績が認められて、2000年の春には、勲一等旭日大綬章を授けている⁽⁸⁾。

竹内はまた、同じく青森旧第二区選挙区の田澤吉郎とともに、“津軽二大派閥”を築きあげた当事者として知られ、一方の派閥領袖として、本県政治史に「田竹時代」という大きな足跡を残した⁽⁹⁾。

② 衆議院議員

竹内黎一は、衆議院・総選挙に出馬すること実に12回を数える。そのうち、10回当選、2度落選している。竹内の初当選は、1963年11月21日の総選挙の時である。当時、「新人ムード」の中で、島口重次郎、田澤吉郎を抑えてトップで当選、5万1,306票を獲得した。竹内37歳の時である。当時の本県では、竹内は“最年少の代議士”であった⁽¹⁰⁾。

陸奥新報紙は、竹内初当選の背景を次のように伝えている。「得票順にみて、まず竹内氏は主地盤の西郡で1万8千近く獲得、父俊吉の前回より1千余を上回り、五所川原市でも4千、北郡で8千に迫る得票で、いわゆる“倍化運動”の作戦がいちおう実を結び、弘前でも、市議らが中心とする新しい支持層に助けられて、これも前回の俊吉氏の得票より約5千ふや

し南黒における田澤、佐藤両氏の激戦の影響を受けての減票を大きくカバーして最高点となった。この竹内氏の勝利は初陣ながら既成地盤を受け継ぎ、しかも、知事の令息ということで、市町村、地改区その他各団体の有力者の支持が“県政との結びつき”で集まったことは否めず、加えて若さと新人の魅力が一般に買われたといえよう⁽¹¹⁾。

衆議院・総選挙に12回出馬した竹内は、平均すると6万5,145票獲得している。順位は第1位が二回、第2位が五回、第3位が三回である。父親譲りの竹内の後援会組織が極めて安定しており、強力な地盤をバックに選挙は盤石であった。参考までに、竹内が総選挙で獲得した票数と順位を掲げておくと、図表①のような結果となっている。

図表① 総選挙での竹内黎一の得票数と順位

年度	得票数	順位
1963年	5万1,306票	1位
1967年	6万0,004票	2位
1969年	4万5,292票	3位
1972年	6万7,860票	2位
1976年	7万1,698票	2位
1979年	6万4,513票	2位
1980年	7万4,053票	1位
1983年	6万5,036票	3位
1986年	7万4,846票	3位
1990年	6万5,555票	(次点で落選)
1993年	7万6,436票	2位
1996年		(比例代表東北ブロック第15位で落選)
(平均)	6万5,145票	

出典：木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社，1989年〕。

だが、歴戦練磨の竹内も1990年の総選挙では、6万5千余票獲得したにもかかわらず、次点で落選を喫した。その背景として、後述するように、核燃施設サイクル問題などで、自民党が逆風の矢面に立ったのが響いた。竹内は最初から苦戦を強いられ、農民政治運動連盟の県本部から推薦を受

けて“核燃かわし”を図った。しかし、地盤である農民層が離れてしまった。この総選挙では、主要地盤の西北五において、自民党の木村守男、社会党の山内弘に浸食された他に、ほとんどの地区で票を落とした⁽¹²⁾。

竹内は国政で通算10期、30年以上長きにわたり、衆議院議員として活動した。この間、自民党の総務、経理局長に就任、また、外務次官、経済企画次官を歴任、衆議院外務委員会・委員長、環境委員会・委員長を歴任、そして1984年には、科学技術庁長官に1年6ヵ月就任するなど、党内外で厚生、労働行政の政策マンとして高い評価を得ていた⁽¹³⁾。

その竹内は自民党内で、派閥として一貫して藤山（愛一郎）派に属していた。父の俊吉が衆議院議員時代に藤山派であったので、それを継承したのだ。竹内は派閥が弱体化し、解体した後も藤山派を名乗って筋を通した。その芯が強くいちずな性格は、自民党の同僚議員からも一目置かれていた。しばらくは無派閥時代が続いたものの、最後は、田中（角栄）派に所属した。もちろん、竹内が田中派＝「木曜会」に身を投じたことについては、賛否両論があり、政治理念と地元の声の間でのギリギリの選択であった⁽¹⁴⁾。

③ 科学技術庁長官

1984年11月31日、自民党総裁に再選された中曽根首相は、内閣改造に踏み切り、竹内黎一を科学技術庁長官に就任させた。竹内は既に58歳に達していた。本県選出国會議員の入閣は、1981年の鈴木善幸・改造内閣時の田澤吉郎（農林大臣）以来3年ぶりのことで、戦後では6人目で通算8回目である⁽¹⁵⁾。

ただ問題なのは、本県の場合、原子力船「むつ」、核燃料施設サイクル問題、および原子力発電所など、科学技術庁関係では難問が山積しており、地元選出の大臣就任で課題解決への期待が高まった一方で、科学技術庁長官のポストという皮肉な巡り合わせで、竹内は政治的に難しい立場に直面

した。

科学技術庁長官就任に際し、竹内は記者団に課題について、次のように述べている。原子力船「むつ」に関しては、「党議（自民党）で決定している方針であり関根浜新定係港建設が進行中だ。私のやることは建設中の新港に必要な予算を確保することだ」と決意を表明。次に、核燃料施設サイクルについては、「現在、青森県知事が各界、各層の意見を徴収しており、その意向、計画内容がはっきりしないと賛否は答えられないことだ。まず知事の意見徴収結果を見守ることが肝要だ」と、慎重な姿勢を示した。また、原発については、「安全性を十分配慮のうえ推進すべきだ。性急に結論を出すのはどうかと思う。拙速主義はとらない」との基本姿勢を表した⁽¹⁶⁾。

竹内は、科学技術庁長官に就任する一方で、総務省の原子力委員会委員長も務めた。委員長として、次のように挨拶している。原発や核燃問題について、当時の政府や竹内の立場を知ることができるので、長くなるが紹介しておく。

「我が国の原子力研究開発利用が本格的に始まって以来30年を経ました。今日では、商業用原子力発電は総発電電力量の20%以上を賄うまでに至っています。このように、原子力発電は石油代替エネルギーの中核をなすに十分なものとなってきております。また、放射線利用も、工業、農林水産業、医療等の分野で幅広く進められており、今や原子力は国民生活や経済活動に欠くべからざるものとなっています。

近時、内外のエネルギー情勢は緩和基調で推移しておりますが、中長期的には石油需給は逼迫化し、石油価格は上昇するとの見方が一般的になされています。また、我が国のエネルギー供給の石油依存度は他の主要先進国に比べて依然として高く、しかも石油輸入の多くを中東地域に依存している等我が国のエネルギー供給構造はいまだ脆弱なものがあります。従って、石油代替エネルギーの開発・導入は引き続き我が国の重要な課題であ

ります。

原子力発電は、石油代替エネルギーの中にあつて、経済性、大量供給性等に優れたエネルギー源として最も有望なものであり、さらに、使用済燃料の再処理によって回収されるプルトニウム及びウランの利用によりウラン資源の有効利用を図ることができるとともに、資源面での対外依存度を低減できるという優れた特長を有するものであります。このため、今後とも、原子力発電の一層積極的な推進を図るとともに、自主的な核燃料サイクルの確立、新型動力炉の開発等の推進に最大限の努力を傾注していくことが必要であると考えております。これまで、動力炉・核燃料開発事業団を中心に関連の研究開発が鋭意進められてきたところではありますが、その成果をふまえ、今春来、青森県に核燃料サイクル関連施設を建設しようとの計画が、電気事業者を中心として進められ、大きな前進がみられつつあることは、我が国原子力開発利用を推進していく上で極めて意義深いものがあり、今後とも官民一体となってその円滑な推進に取り組んでいかなければならないと考えております⁽¹⁷⁾。

実はこの当時、青森県内では核燃料施設サイクルが大きな争点となっていた。そのため、六ヶ所村長選挙では、「凍結派」、「積極的推進派」、および「白紙撤回派」が三どもえの戦いを展開した。その結果、1988年12月の村長選では、核燃料凍結派の土田浩が当選した。ここでいう“凍結”という用語は、六ヶ所村長選挙後、県内政治家の間で一種の流行語となり、総選挙に出馬する自民党の議員の中でも凍結を訴えるものが続出した。その急先鋒は、実は県が核燃料施設サイクルの受け入れを決定した当時の科学技術庁長官の竹内黎一自身であった。“凍結”というのは、単に選挙向けの公約にすぎず、春になれば溶ける雪と同じで、核燃料施設は時間をかけて慎重に促進するということである⁽¹⁸⁾。

④ 政治家「竹内黎一」

竹内黎一は、永田町では勉強家だということでも有名で、しかも仕事熱心であり、政治家として評判も高かった。しかし、当選回数割には、閣僚ポストに恵まれず、当選9回目衆議院議員20年を経て、ようやく科学技術庁長官のポストに就任したにすぎない⁽¹⁹⁾。

父俊吉は、「次は大臣」の声がかかりながら、県政界の動揺を抑えるため衆議院議員の座を捨て、県知事への転身を余儀なくされた。それだけに、「竹内後援会」の面々にとって、大臣の椅子は親子二代にわたるいわば“悲願”であった。同じ二区選出の田澤吉郎が、数回にわたり主要大臣を経験したのとは対照的であった。

その背景としては、改めていうまでもなく、竹内が長らく藤山派に属し、非主流派の少数派閥として大臣就任の機会を逃してしまった、からに他ならない。

竹内は「政治家二世」として、父の基盤を世襲した、政界ではいわば“サラブレッド”であった。だから、周囲からは、「政治的野心がもっとあれば、政治家として大成したはず」、という見方が常につきまとった。実際、竹内の行動は、地元の選挙民にとって、「きれいごと過ぎる」と映り、齒がゆい思いを与えた点も否めない⁽²⁰⁾。

確かに、竹内は晩年、田中派に所属したものの、そこではまた、“外様”扱いされて悲哀を味わった。しかし、派閥の非情なメカニズムにもまれたことで、むしろ竹内の人間的な幅が大きくなったという評価もある。竹内自身、ドロドロした政界のしらがみに染まりきれない「紳士」としての定評は変わらなかったが、理知的で筋を通した政治家であった⁽²¹⁾。

竹内の趣味は推理小説の収集で、多くの書籍を愛読した。父譲りのインテリとして知られ、永田町では常の英字新聞を小脇に抱えていた。竹内は政治家として物事を見極める、鋭い洞察力を持ち合わせていた。それが竹内をして、衆議院議員として10回も当選させ、旧青森県第二区で、「田竹

時代」を築き、大きな影響力を行使した原点であろう。1996年の衆議院選では、比例代表に回されて落選、引退を余儀なくされたが、その時の記者会見で引退の理由を聞かれた竹内は、「端的に話すと“時の流れ”だ」と答え、政治家として冷静さを示したのが印象に残っている⁽²²⁾

3. 山内 弘

① 出生・経歴



山内 弘（1929年2月22日～2006年6月30日）

〈年表〉

- ・1929年2月22日 青森県中津軽郡相馬村（現・弘前市）に生まれる。
- ・1946年3月 旧制弘前中学卒業。
- ・1946年4月 逓信省弘前郵便局勤務。
- ・1949年 電気通信省弘前電話局勤務。
- ・1950年 全逓信労働組合弘前支部青年婦人部長。
- ・1955年 全電通労働組合弘前支部執行委員長。
- ・1959年 弘前地方労働組合同議議長。
- ・1967年4月15日 青森県会議員選に出馬・初当選。
- ・1971年4月11日 青森県会議員選に出馬・当選（二期目）。
- ・1975年4月13日 青森県会議員選に出馬・当選（三期目）。
- ・1977年11月 全国議長会から自治功労者として表彰。
- ・1979年4月8日 青森県議会議員選に出馬・落選。
- ・1980年6月22日 参議院・通常選挙に出馬・落選。
- ・1983年4月10日 青森県議会議員選に出馬・当選（四期目）。
- ・1986年7月6日 衆議院・総選挙に出馬・落選。

- ・1990年2月18日 衆議院・総選挙に出馬・初当選。
- ・1993年7月18日 衆議院・総選挙に出馬・落選。
- ・2006年6月30日 死去。享年77歳。

出典：『青森県議会アルバム』（青森県議会事務局，1987年）

すでに述べたように、山内弘は1929年2月22日、青森県中津軽郡相馬村（現・弘前市）に生まれた。父・千代一は、相馬村の村会議員を二期務めている。山内は旧制弘前中学4年の時、海軍予科練に入隊、終戦は大湊の航空隊で迎えた。戦後、弘前中学に復学、1946年春に卒業し、通信省弘前郵便局に勤務した⁽²³⁾。

その後、山内は全通労働組合弘前支部副委員長、全電通労働組合弘前支部委員長などを経て、1959年、弘前地方労評議長に就任した。1967年には、県会議員に初当選、これを通算四期16年務めている。またこの間に、日本社会党青森県本部執行委員長に就任、五期務めた。1990年の衆議院・総選挙では“反核燃”を訴えて、社会党公認で青森旧第二区から出馬して当選、一期務めた。だが、1993年の衆議院・総選挙では落選、政界を引退した。2006年6月30日、多臓器不全により逝去、享年77歳であった⁽²⁴⁾。

② 県議会議員

山内弘は、1967年4月15日、社会党公認で、弘前・中郡選挙区（定数名）から県議会議員選挙に出馬して初当選、これを通算四期16年務めあげ、労組代表の県会議員として活躍した。初当選の時は8,952票を獲得し、定数3名の中第二位で当選している。時に、山内は38歳であった⁽²⁵⁾。

その後、山内は1971年、1975年と連続して県会議員選で当選したものの、1979年の県会議員選挙では落選した。しかし、1983年の県議選では返り咲き、復帰した。山内は次に、青森県社会党本部委員長として、国政選挙に転身を図った。1980年4月の参議院・通常選挙（20万7,121票）、および1986年4月の衆参同時選挙時、衆議院・総選挙に出馬（2万4,417票）し

たものの、いずれも敗退を喫している。

図表②は、山内が県会議員選に出馬した年度と得票数を示したものである。1979年4月の県議選では、9,694票に留まり最下位で落選した。山内に「気のゆるみがあった」のであろうか⁽²⁶⁾。結局、県議選には都合6回出馬して、4回当選した。平均得票は1万1,300票である。

図表② 山内弘の県議選出馬年度と得票数

年度	得票数	順位
1967年	8,952票	初当選 2位
1971年	1万1,375票	当選(二期目) 4位
1975年	1万1,162票	当選(三期目) 5位
1979年	9,694票	(落選) 8位
1983年	1万5,319票	当選(四期目) 1位
(平均)	1万1,300票	

出典：『東奥日報』。

山内は、県会議員時代に、衛生民生労働、文教公安、農林、土木公営、水産商工、決算・東北新幹線対策(特別)、および総務企画各委員会委員に就任、その他に、県都計画地方審議委員、さらに日本社会党弘前総支部委員長、同執行委員長を歴任した。1977年11月には、全国議長会から自治功労者(10年)として表彰されている⁽²⁷⁾。

③ 衆議院議員

山内弘は1990年2月の衆議院・総選挙で、社会党の公認候補として青森旧第二区に出馬、7万1,855票を獲得した。前回は共産党の津川武一と共倒れて落選したものの、今回は第二位で当選、故・島口重次郎以来、実に22年ぶりに社会党の議席を復活させた。

当選した山内は、「保守王国といわれる青森県に、革新の政治を、労農提携を位置付けなければならない」と初当選の喜びを語り、「最大の功労者は農業者のみなさん。消費税問題で一緒に闘った中小企業者の方、そし

て社会党の仲間」と頭を下げ、「労農提携の第一歩だ。青森県政治の変革、夜明けを見る思いだ」と挨拶した⁽²⁸⁾。山内は61歳になっていた。

陸奥新報紙は、山内当選の背景を次のように報じている。「22年ぶりの議席奪回を目指した山内氏＝社会(新)は、昨夏参院選で初めて社会党が取り組んだ“労農提携”を再形成。これまで食い込めなかった南黒、西、北郡など、自民・前職と互角の競り合をみせ、大票田の中弘地区でも農協青年部、婦人部などの強力な支援を受けて、二位に入る追い風当選」を果たした⁽²⁹⁾。

一方、東奥日報紙は、「社説：県民は自民党独占にノー」の中で、社会党・山内の当選を次のように報じた。「二区社会党の実力を数倍する自民離れ票が山内に集中したのは確かだ。要するに“自民党には独占を与えてみたが、この三年半、何も目ぼしい結果が得られなかった”という有権者の反省票が、今回は非自民の関・山内氏に流れた、ともいえる」⁽³⁰⁾。

さらに、デーリー東北紙は、「今回の衆議院議員選挙で、反核燃を訴えた社会党の議席奪回は、県民の間に広がっている反核燃意識の高まりを改めて示したものといえよう」⁽³¹⁾と、今回の衆議院・総選挙の特色を総括している。

1993年7月に行われた衆議院・総選挙では、山内の得票は3万6,997票に留まり、第三位の田澤に3万0,015票の大差をつけられ次点で落選した。山内は前回に比べて、3万4,858票も減らした。それはなぜか。

陸奥新報紙は、山内の落選を“山内氏 農業者離れ響く”という見出しをつけて、次のように報道している。「山内氏は前回のような反核燃、反消費税のような追い風もなく“労農提携”もうわべだけに終わり、農業者票をまとめ切れなかった。また政治改革をめぐる非自民票も木村(守男)氏に流れて多くを取り込めず、保守三氏の激しいせめぎ合いの間で埋没。組織票の一部まで食われて全域で票を減らし、前回は約3万5千票余下回る惨敗に終わった」⁽³²⁾。

今回の衆議院・総選挙では、全党が政治改革を主張、そのため争点は不鮮明であった。また本県の重要な争点であった核燃問題も、いわゆる“核燃施設三点セット”が操業または着工段階に入り、県民意識としては現状追認の気分が色濃く、必ずしも大きな争点になり得なかったのは、山内陣営にとって痛かった。敗退した山内は、「私が農業者の期待に明確な答えを出したのか、反省したい。党としても、自民党に吹くはずの逆風が社会党に向かってくるといふ政治情勢を把握できなかった弱さがあった」、と敗因を分析した⁽³³⁾。

④ 政治家「山内弘」

山内弘は、旧制弘前中学を卒業後、地元の弘前郵便局に勤務、組合員として活動、労組代表として弘前地方労働組合議長を経て、県会議員、衆議院議員となり、青森旧第二区の社会党を代表した、いわば労組出身の政治家である。

初めて県議選に当選した1967年4月、山内は「私が勝ったのではなく、労農提携の見事な成果です。新しい県政に下積みの働くものの声を反映させたい」、と労働者の立場を強調している⁽³⁴⁾。

山内は社会党青森県支部執行委員長として、長らく県会議員として活躍したのみならず、衆議院一期を務めあげた。本県の社会党を代表する“顔”として、参議院選や衆議院選に挑み、「革新勢力」拡大のために貢献した。その意味で、山内が1990年2月の総選挙で7万票余りを獲得し、青森旧第二区で22年ぶりに社会党議席を取り戻したのは最大の功績であって、政治家山内にとってはまた頂点の時でもあった。

山内が社会党の県会議員、および社会党青森県支部執行委員長として活動した時代は、おりしも本県では竹内俊吉・知事の時代で、県議会では竹内知事と激しくやり合った。

山内は、竹内県政を、次のように批判している。「平面的で“うわべ”

の手慣れた政治」だと。その上で「政治は時代がつくるといって、時代の先見性が一歩欠落していた。時代の推移についての判断はいいが、さらに奥の深い判断がなかった」と手厳しい⁽³⁵⁾。山内は労組出身者の政治家として、県政が、原子力船「むつ」、核燃施設とも政府・財界の主導で進められることに強い危機感を抱き、県民の安全と生活向上のため、革新の立場から県政を牽制したのだ。

4. おわりに

竹内黎一は、世襲の政治家二世で、いわば「サラブレッド」として、保守勢力＝自民党を代表する政治家であった⁽³⁶⁾。竹内は派閥の領袖として、旧青森第二区＝津軽地方に長らく君臨した。一方、山内は、組合員として下からたたき上げであり、労働組合をバックにのし上がってきた本県の革新勢力＝社会党を代表する政治家であった。

竹内の場合、父俊吉の地盤を引き継ぎ、順調に衆議院議員に当選、十期も務めあげ、“エリートコース”を歩み、最後は科学技術庁長官の地位に就いた。一方、山内の場合、いわば、郵便局員として“下積み生活”から這い上がり、長い県議員を経て、ようやく衆議院議員の地位を得た苦労人だ⁽³⁷⁾。

竹内・山内の両人は、1990年の衆議院総選挙では、激しく激突した。この時、反核燃運動の“風”に乗った山内が制し、竹内は初めて落選の憂き目をみた。反核燃に対する竹内の曖昧な姿勢が災いしたのだ⁽³⁸⁾。しかし、次の1993年の衆議院・総選挙では、一転して竹内が底力を見せて返り咲き、「保守大国」の健在ぶりを示した。竹内黎一と山内弘の政治家としての足跡を辿ることで、1990年代初頭における青森県政治の断面を眺めることができよう。

〈注〉

- (1) 『青森県人名事典』〔東奥日報, 2002年〕, 939頁。
- (2) 『東奥日報』2015年9月6日, 『陸奥新報』2015年9月6日。
- (3) 『青森県人物・人材情報リスト 2007』〔日外アソシエーツ, 2006年〕, 329頁。
- (4) 藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社, 2016年〕, 118頁, 竹内は「ボクが出れば地元の反発を招く」といったん出馬を拒否した。しかし, 「あなたが出馬しないと, 竹内派は分裂する」と後援会幹部にいわれ, 出馬に踏み切った(『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部, 1983年〕, 22頁)。
- (5) 「竹内黎一氏死去」『東奥日報』2015年9月6日。
- (6) 「竹内黎一氏を悼むー筋通した政治家人生」同上。
- (7) 前掲書「竹内黎一氏死去」『東奥日報』2015年9月6日。
- (8) 同上。
- (9) 同上。
- (10) 木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社, 1989年〕, 140頁, 『東奥日報』1963年11月22日。
- (11) 「保守王国ゆらぐ一衆院選・本県の足跡」『陸奥新報』1963年11月23日。
- (12) 『陸奥新報』1990年2月19日, 竹内は主力地盤の西郡で, 前回より3千票近くも票を減らし, 結果的にこれがたたった。西郡は反核燃の風が吹き荒れていた上, 減反政策など自民党のコメ政策への不信感も高まっていた。
竹内は元科学技術庁長官として, 反核燃運動の標的にされ, 農政への不満も, ぶっつけられる形となった(「核燃, 農政不信……一氣に一本県総選挙を振り返る一記者座談会」『東奥日報』1990年2月19日)。
- (13) 前掲書「竹内黎一氏を悼む一筋通した政治家人生」『東奥日報』2015年9月6日。
- (14) 「天地人」『東奥日報』1984年11月2日, 「新幹線, むつ小川原開発などの大型プロジェクトを実現させるには, 一人の力では限度がある。地元から無派閥では大臣になれない, との声もあった」と, 竹内は木曜会=田中派入りの動機を説明している(前掲書『風雪の人脈 第一部・政界編』, 22頁)。
- (15) 『東奥日報』1984年11月1日。
- (16) 『陸奥新報』1984年11月1日。
- (17) www.aec.go.jp/jicst/NC/about/ugoki/geppou/V29/N11/198401...
- (18) 明石昇二郎『六ヶ所核燃村長選』〔野草社, 1990年〕, 222頁。
- (19) 「新閣僚の横顔」『陸奥新報』1984年11月1日。
- (20) 前掲書「竹内氏を悼む一筋道した政治家人生」『東奥日報』2015年9月6日, 「天地人」『東奥日報』1984年11月2日。
- (21) 同上。

- (22) 「田竹で時代を築く」『陸奥新報』2015年9月6日。
- (23) 前掲書『風雪の人脈 第一部・政界編』, 187頁。
- (24) 前掲書『青森県人物・人材情報リスト 2007』, 329頁。
- (25) 『東奥日報』1967年4月16日。
- (26) 前掲書『風雪の人脈 第一部・政界編』, 187頁。
- (27) 『青森県議会 アルバム』〔青森県議会事務局, 1987年〕。
- (28) 『東奥日報』1990年2月19日, 「社会党躍進の底流—乱気流下の県政界1」『陸奥新報』1990年2月20日。
- (29) 『陸奥新報』1990年2月19日。
- (30) 『東奥日報』1990年2月19日。
- (31) 『デーリー東北』1990年2月19日。
- (32) 『陸奥新報』1993年7月19日。
- (33) 「社説：県民は“変革”より“安定”」『東奥日報』1993年7月19日, 20面。
- (34) 同上, 1967年4月16日。
- (35) 「知事交代(中)—16年の評価」『陸奥新報』1979年2月24日。
- (36) 前掲書「竹内黎一氏を悼む—筋通した政治家人生」『東奥日報』2015年9月6日。
- (37) 青森二区選出の社会党衆議院議員としては、島口重次郎がいる。島口は1958年、1963年、および1967年の総選挙で三回当選している。島口は戦前からの労農運動家であり、社会党の組織票に加えて、個人票も多かった。労組出身の山内とは肌が合わず、山内は「当時の社会党は島口私党みたいなものだった」と語っている(前掲書『風雲の人脈 第一部・政界編』, 188頁)。
- (38) 「社説：県民は自民党独占にノー」, 「核燃、農政不信……一気に一本県総選挙を振り返る」『東奥日報』1990年2月19日。

*参考文献

- ・木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社, 1989年〕。
- ・藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社, 2016年〕。
- ・明石昇二郎『六ヶ所核燃村長選』〔野草社, 1990年〕。
- ・『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部, 1983年〕。
- ・『議会制度百年史 衆議院議員名鑑』〔大蔵省, 1990年〕。
- ・『青森県議会 アルバム』〔青森県議会事務局, 1987年〕。
- ・『青森県人名事典』〔東奥日報, 2002年〕。
- ・『青森県人物・人材情報リスト 2007』〔日外アソシエーツ, 2006年〕。
- ・『東奥日報』。
- ・『陸奥新報』。
- ・『デーリー東北』。

Ⅱ. 津島雄二と関晴正

1. はじめに

津島雄二は、1930年1月24日、東京都杉並区で生まれた。旧制府立一中、旧制第一高等学校を経て、東京大学法学部を卒業。1953年から1974年まで大蔵省に勤務、この間、1959年、信濃中野税務署長、1974年、大蔵省大臣官房参事官などを歴任した。1976年、青森県旧第一区から自民党公認で、衆議院・総選挙に出馬して当選、連続11期23年間、衆議院議員を務めあげ、その間、1990年と2000年、二度も厚生大臣に就任している⁽¹⁾。

津島雄二の生家は志摩家であった。だが、1歳の時、母方の上野姓を名のり、そして1973年、総選挙に出馬する前、津島家に改姓した。雄二の妻園子は、太宰治（本名・津島修治）の長女で、青森県知事、衆議院議員、および参議院議員であった津島文治の姪にあたる⁽²⁾。

津島雄二は、衆議院議員として政界入りした当初、自民党の宏池会に所属していた。しかし離党、ただ、その後自民党に復帰（小淵派）し、橋本派の代表を経て津島派を率いた。2009年7月19日、津島は衆議院議員・総選挙に出馬しない意向を表明、7月21日の衆議院解散に伴い、政界から引退した。現在は、弁護士業を営んでいる⁽³⁾。

一方、関晴正は、1923年11月26日、青森県つがる市（旧木造町）に生まれた。旧制青森中学（現・県立青森高校）を経て、1945年青森師範学校を卒業後、小学校教師となり、日教組中央委員に就任した。関は1951年、青森市議に初当選、二期務め、その後、青森県議五期を経て、1979年の衆議院・総選挙で青森県旧第一区から、社会党公認で出馬して初当選した。通算すると、衆院当選四期10年を数えた。関は1986年の総選挙では落選、1990年の総選挙で復帰したものの、1993年には出馬せず、地盤を今村修に譲り、政界を引退した⁽⁴⁾。2008年10月26日、脳梗塞後遺症のため青森市内

の病院で死去、享年84歳であった。

本章では、青森市の保守勢力を代表する政治家の一人として自民党の津島雄二を、そして、同じく青森市の革新勢力を代表する政治家の一人として社会党の関晴正二人の経歴、選挙運動、および政治家としての活動を紹介する。前者は、東京生まれで、青森県とは直接関わりがなかった。だが、太宰治の長女と結婚、津島家に改姓、長らく衆議院議員として活躍し、二回も厚生大臣を務めた。一方後者は、青森県つがる市生まれで教師となり、日教組中央委員として活動、市議、県議を経て、衆議院議員に当選し、「護憲・平和・反核燃運動」に力を注いだ。関は、本県の革新勢力を代表する政治家の一人である⁽⁵⁾。

2. 津島雄二

① 出生・経歴



津島雄二（1930年1月24日～）

〈年表〉

- ・1930年1月24日 東京都杉並区に生まれる。
- ・1937年3月 中野区立桃園第三尋常小学校（現在の桃花小）卒業。
- ・1946年3月 都立第一中学校（現・都立日比谷高校）卒業。
- ・1949年3月 旧制第一高等学校卒業。
- ・1952年11月 司法試験合格。
- ・1953年3月 東京大学法学部卒業。

- ・1953年4月 大蔵省入省。
- ・1955年7月 フルブライト留学生として米国留学。
- ・1959年 関東信越国税局信濃中野税務署長に就任。
- ・1963年-1967年 在フランス日本国大使館三等書記官として赴任。
- ・1964年5月 赴任先のフランス・パリで結婚（妻は津島園子）。
- ・1969年8月 日本専売公社管理調整本部総務課長に就任。
- ・1971年7月 大蔵省大臣官房参事官に就任。
- ・1972年7月 国税庁直税部法人税課長に就任。
- ・1974年11月 大蔵省大臣官房参事官に就任。
- ・1974年12月 大蔵省を退官。
- ・1976年12月 衆議院・総選挙に出馬、初当選（以後、連続11回当選）。
- ・1981年12月 厚生政務次官に就任。
- ・1983年12月 運輸政務次官に就任。
- ・1987年11月 自民党経理局長に就任。
- ・1988年12月 衆議院社会労働委員長に就任。
- ・1990年2月 第二次海部内閣で厚生大臣に就任。
- ・1993年7月 自民党政務調査会会長代理に就任。
- ・2000年7月 第二次森内閣で厚生大臣に就任。
- ・2002年1月 衆議院予算委員長に就任。
- ・2003年11月 自民党税制調査会会長に就任。
- ・2004年1月 衆議院予算委員長に就任。
- ・2005年2月 第一東京弁護士会に弁護士登録。
- ・2005年11月 津島派（平成研究会）会長に就任。
- ・2006年11月 自民党税制調査会会長に就任。
- ・2009年7月 衆議院・総選挙に出馬せず、政界を引退。
- ・2009年11月3日 秋の叙勲で旭日大綬章を授章。
- ・2010年2月 税理士登録。
- ・2010年4月 株式会社新生銀行顧問。
- ・2011年6月 仏政府よりレジオンドヌール勲章オフィシエを受章。

出典：『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、960頁、『青森県人材・人物情報リスト 2007年』〔日外アソシエーツ、2006年〕、208頁。

津島雄二は、長野県出身の志摩亮平と島根県出身の上野泰子の次男として東京杉並区で生まれた。母の泰子が上野家の一人娘であったので、次男の雄二が上野家を継ぎ、1歳の時から上野家を名乗っていた。雄二は、府立一中から一高、東大法学部を経て、1953年大蔵省に入省した。既述のように、見合い結婚した相手の園子は、作家・太宰治の長女であり、県知事、衆議院議員、および参議院議員を務めた津島文治の姪である。1973年2月、

雄二は津島姓に改姓した。津島雄二は大蔵省時代、1955年、フルブライト留学生として米国シラキュース大学に留学、1963年、駐仏大使館一等書記官などを含めて6年間、欧米で生活、その後、国税庁直税部法人税課長、大蔵省大臣官房参事官などを歴任した⁽⁶⁾。

津島は、1974年12月、大蔵省を退官、そして1976年12月の衆議院・総選挙に、自民党公認で青森旧第一区から出馬、5万9,765票を獲得、第三位で初当選した。46歳の時である。以後、衆議院・総選挙で一度も落選することもなく、連続11回当選を果たした。だが、2009年7月の衆議院総選挙には不出馬を宣言、“若い人に”と述べて引退を表明した。津島は79歳の高齢に達していた。

津島は衆議院議員時代、衆議院予算委員長などを務め、第二次海部内閣および第二次森内閣の下で二度にわたり厚生大臣に就任、また、自民党経理局長や自民党税制調査会会長を歴任した。政界入りした当初、津島は自民党の宏池会（宮沢派）に所属していた。しかし、1994年7月、自民党を離党、無所属となったものの、1995年3月、自民党に復党、小渕派→橋本派に所属、2005年には平成研究会（旧橋本派）の会長に就任、派閥領袖として津島派を率いた⁽⁷⁾。なお、政界から引退後、田辺総合法律事務所で弁護士として活動している。

② 大蔵官僚

既述のように、津島雄二は、1953年、大蔵省に入省し21年にわたって、大蔵官僚として勤めた。その間、関東信越国税局信濃中野税務署長、日本専売公社管理調整本部総務課長、国税庁直税部法人税課長、および大蔵省大臣官房参事官などを歴任した。なお、在仏時代に、津島は大平内閣時代に初めて消費税の前身である一般消費税導入案の先駆けとなるレポートを作成している⁽⁸⁾。

津島は、1974年12月、46歳の時に大蔵省を退職、青森県旧第一区から衆

議院・総選挙に出馬する準備をする。伯父で、元知事・津島文治の支援があったし、また雄二自身も、大蔵省に見切りをつけて衆議院議員への出馬を決意していたからだ⁽⁹⁾。

すでに1973年2月、雄二は、「津島」家に改姓、青森市を拠点に総選挙への出馬の準備をしており、津軽・南部地方に散在する、いわゆる“津島宗”を足場に2年あまり末端まで支持者を浸透させていった。その際、妻の園子も父の太宰治を偲ぶ「桜桃のつどい」を組織、「輸入候補者」である夫の売り込みに一役買って協力した⁽¹⁰⁾。

津島雄二は、いわゆる「落下傘候補」であった。だが、津島家のネームバリューもあり、しかも、一高・東大・大蔵官僚というこれまで青森県の衆議院議員に見られない毛並のよさを有していた。また大蔵官僚上りにしてはソフトで親しみのもてる人柄も功奏した、地元においても、「青森県にも大蔵省に顔が利く政治家が必要であった」、のは間違いない⁽¹¹⁾。

③ 衆議院議員

津島雄二は1976年12月、自民党公認で衆議院・総選挙に出馬、5万9,765票を獲得した。青森市だけで2万7,812票を獲得、全体の46.5%を占めた。当選した順位は第三位であったものの、安定した戦いぶりで、大型新人という前評判通りの成績であった⁽¹²⁾。

見事に初当選を果たした津島は、青森市の選挙事務所で当選の喜びを次のように述べた。「私は政治に新風をと訴えた。選挙は同志的な結合でやらないと、きれいにならない。そうでないと政治的に曲がってくる。青森県の繁栄も訴えました。県政の大改革が必要です。国の力を大切な地域（青森県）に向けることです。大都会に人口が流れるのを変えなければだめです。財政の面から歯止めをかけたい。足りなかったなら国土庁も活用する」⁽¹³⁾。

地元の東奥日報紙は、津島雄二が当選した背景を次のように報道した。

「青森市で一人を除いてほとんどの保守系県議の支持を取り付けたのが大きかった。各地に残る“津島宗”が戦いの足場になったし、一高校→東大から大蔵省官僚というこれまでの本県出身の代議士にない系譜も、一つの期待感となって表れたとみてよさそうだ。……経歴に似ずソフトな人柄は、町村長の間で評判がよく、日常活動でこれから点数をかせば、“安定勢力”となってゆく公算が大きい」⁽¹⁴⁾。

今回の衆議院選での勝利を、津島自身「津軽弁や南部弁がしゃべれないボクが代議士になれたのは、テレビ時代だからですよ。テレビが発達したため、標準語が違和感なく茶の間に入り込んでいるので、ボクの話も県民の皆様聞いてもらえる」と述べて、当選は「情報化時代」のおかげであった、と吐露している⁽¹⁵⁾。

以後、津島雄二は、衆議院・総選挙で、11回連続当選を果たした。図表③は、津島が総選挙で獲得した票数と順位を表したものである。安定した集票ぶりである。

津島雄二は、1976年から2005年の総選挙に出馬すること都合11回、そのすべてにおいて勝利し、平均すると、8万5,273票獲得している。しかし、

図表③ 総選挙での津島雄二の得票数と順位

年度	得票数	順位
1976年	5万9,765票	3位
1979年	7万7,804票	1位
1980年	6万9,380票	4位
1983年	9万6,478票	2位
1986年	10万0,385票	3位
1990年	8万8,328票	3位
1993年	8万7,182票	3位
1996年	8万6,411票	1位（小選挙区）
2000年	9万6,691票	1位
2003年	8万1,511票	1位（小選挙区）
2005年	9万4,072票	1位（小選挙区）

出典：木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』（北方新社，1989年），『東奥日報』。

2009年7月の衆議院・総選挙には、津島は出馬しなかった。「若い人に」議席を譲るとするのが理由で、引退を表明したのである⁽¹⁶⁾。

津島が政界から引退を決意した背景としては、既に79歳の高齢に達しており、自民主党に対する逆風が吹く状況の中で、総選挙での勝機を見出せなかった、ものと思われる。選挙区では「高齢多選」への強い批判もあり、勝利への可能性が困難な状況に追い込まれていたのだろう。

実際、2009年7月の青森市長選では、津島の盟友で六選を目指した佐々木誠造が、組織力で圧倒しながらも「高齢多選」への批判と「市政刷新」を求める声の中で、対立候補に大敗した。組織力を頼みとする津島陣営にとって、足元での佐々木現市長の敗北は大きな衝撃であり、この結果を見れば、高齢多選という批判は、有権者の「津島離れ」を意味した。そこで、津島は選挙での劣勢がささやかれる中で、最終的に「不敗」のまま身を引く決意を選択したのであろう⁽¹⁷⁾。

④ 厚生大臣

既述のように、津島雄二は、衆議院議員在任中、二度も厚生大臣に就任している。一度目は、1990年2月、第二次海部内閣の下で、二度目は10年後の2000年7月、第二次森内閣の下である。前者は海部内閣の成立に寄与したからであり、後者は有力派閥である橋本派の代表であったからだという。

初入閣した時、津島は60歳であった。前回、前々回と組閣のたびに下馬評に上がりながら、入閣を果たせなかった。自民主党主流派の宏池会（宮沢派）に所属、衆議院議員当選六回、これまで厚生、運輸の両政務次官を務めた他に、自民主党の経理局長、衆院に社会労働委員会委員長を歴任していた。晴れて厚生大臣に就任した津島は、「厚生行政は非常にやりがいのある仕事だ。国にとっても青森県にとっても重要な時期でもあり、責任の重さを痛感する。一生懸命働きます」と抱負を述べた⁽¹⁸⁾。

二度目の厚生大臣就任は、10年後の第二次森内閣の時に、当選九回目で、津島は70歳に達していた。かつては宮沢派のホープであったものの、1994年の首相指名で党議決定に反して海部俊樹元首相を擁立して離党。だが、翌95年に復党した。永田町での評判は、東大3年生の時の在学中に司法試験に合格した秀才であり、エリートコースを歩み「高すぎるプライド、切れすぎる頭が難点」だ、といわれた⁽¹⁹⁾。

二度目の入閣を果たした津島は、地元のマスコミのインタビューに応じ、「介護保険サービスの円滑な実施や少子化対策に全力を尽くす」などと抱負を述べ、また青森県が掲げる“福祉日本一”の目標のため、担当大臣として応援する意向を示した⁽²⁰⁾。

⑤ 政治家「津島雄二」

津島雄二は、作家太宰治の娘ムコという異色の家系を有し、しかも旧制一高、東大法学部、在学中の司法試験合格後、大蔵省入省という典型的な“エリートコース”を歩んできた。衆議院議員として政界入り後、宏池会（宮沢派）の重鎮として、宮沢元総理の期待を集めてきた。しかし、派閥総会での発言で物議を醸し、海部元総理に義理立てをして、1994年6月に、自民党を離党した経緯がある。その後、1995年3月、自民党に復帰、小渕派→橋本派に属し、2005年11月には、橋本派の会長となり、津島派を率いてきた⁽²¹⁾。

ただ、このような派閥の事情や、また会長就任時に75歳という高齢であったので、津島は会長だとはいっても、総裁候補という見方は全くなかった。既述のように、2009年7月19日、衆議院・総選挙に出馬しない意向を表明、7月21日の衆議院解散に伴い、政界を引退した（後継として息子の淳が出馬）。こうした動きは『週刊文春』誌上で「出世レースの敗北により転身した雇われマダム」とか「園子夫人頼みの平成無責任男」、などと酷評された⁽²²⁾。

津島雄二は、秀才でエリートコースを歩んできた政治家である。それだけに、物の考え方も「合理的」でかつ用意周到である。津島の場合、先が見える分、後先を十分に考えずに行動する傾向がある。自民党を離党・復党を繰り返した政治姿勢にそれが現れている。先見性が大事だという政治家の能力を考えるなら、それはマイナス要素ではないのか。

津島は最終的に、政治家として衆議院・総選挙に不出場という選択した。地域に張り巡らした地区後援会、建設業界などによる支援組織、自民党の県議、市町村議らが衆議院議員当選11回という負けられない選挙を支えてきた。しかしながら、津島陣営は、政権交代をイメージ戦略として打ち出す民主党に対抗するため、戦略の立て直しを迫られていた。また、支持組織の高齢化や、共助関係にあった佐々木・前青森市長の地区後援会や業界支援グループが解散するなど、重層さを誇っていた選挙態勢も再構築が必要となっていた。そこで理性的で「合理主義者」の津島は、選挙で敗退するという不名誉な事態を避けるために、不出馬という政治的選択をし、引退表明したのである⁽²³⁾。

政治家として、津島の行動は、ある意味で立派な幕引きであったことは間違いない。だが、後継候補者の選定については、当初、「私の政治哲学、政治信条をよく理解してくれる人に引き継いでほしい」との思いを明らかにしたものの、具体的な名前を明らかにしなかった。ただ、その後、秘書で長男の津島淳が後継者として浮上、結局、青森県に育つもしないし仲間もいない、息子に継承させることになったのは遺憾である。もはや、「津島家」でもあるまい。淳は一度落選を味わったが、しかしその後、衆議院議員に二度当選、世襲を後継する形となった⁽²⁴⁾。

3. 関晴正

① 出生・経歴



関 晴正（1923年11月26日～2008年10月26日）

〈年表〉

- ・1923年11月26日 青森県つがる市（旧木造町）に生まれる。
- ・1941年 3月 旧制青森中学卒業。
- ・1945年 9月 青森師範学校卒業。
- ・1945年 9月 六ヶ所村倉内小学校に赴任。
- ・1946年 9月 青森市浪打小学校に赴任。
- ・1948年～1951年 日教組中央委員に選出。
- ・1949年 3月 青森市野脇小学校に赴任。
- ・1949年 4月 青森市教組書記長に選出。
- ・1950年 4月 県教組執行委員（文化部長）に選出。
- ・1950年11月 日本社会党に入党。
- ・1951年 4月 青森市議選に出馬・当選。
- ・1955年 4月 青森市議選に出馬・再選。
- ・1959年 4月 青森県議選に出馬・当選（連続五回当選）。
- ・1969年 5月 社会党県本部書記長に就任。
- ・1974年12月 社会党県本部執行委員長に就任。
- ・1975年 2月 県知事選に出馬・落選。
- ・1977年 7月 参議院・通常選挙に出馬・落選。
- ・1979年10月 衆議院・総選挙に出馬・初当選。
- ・1980年 6月 衆議院・総選挙に出馬・再選。
- ・1983年12月 衆議院・総選挙に出馬・三選。
- ・1986年 7月 衆議院・総選挙に出馬・落選。
- ・1987年 2月 県知事選に出馬・落選。
- ・1990年 2月 衆議院・総選挙に出馬・四選。

- ・1996年 新社会党に参画。
- ・2008年10月26日 死去、享年84歳。

出典：「付録 昭和50年4月当選議員 略歴」『青森県議会史 自昭和50年～至昭和58年』〔青森県議会，1989年〕，1444頁，朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部，1980年〕，71～77頁。

関晴正は、1923年11月26日、青森県つがる市（旧木造町）に生まれる。旧制青森中学を経て、1945年、青森師範学校を卒業した。その後、小学校教諭、県教職員組合執行委員、および日教組中央委員を歴任、1954年には、旧社会党に入党した⁽²⁵⁾。

関は、1951年4月、27歳で青森市会議員に出馬して当選、二期務めた。また1959年4月、県会議員選に出馬・当選、これを五期務め、政治家として道を歩んだ。そして1979年10月、衆議院・総選挙に出馬7万2,556票獲得・初当選した。1986年7月の衆議院・総選挙では、落選したものの、次の1990年2月の衆議院・総選挙では、16万1,579票獲得トップ当選で振り返り、通算すると四期も、衆議院議員を務めた。また、社会党の公認候補者とし、関は1975年と1987年には県知事選、また1989年には青森市長選に出馬したが、そのいずれでも落選している⁽²⁶⁾。

この間、関は社会党県本部書記長、および同執行委員長として活動した。1996年に社民党に移行する際に、これに合流せず、護憲を強く打ち出した新社会党に参画、“不義と不正は許さない”が関の信念だった。その後、原水禁止国民会議青森県民代表委員、青森市オンブズマン支部長などを務めた⁽²⁷⁾。

以上で紹介してきたように、関は青森市議二期、県議五期、および衆議院議員四期務めあげ、地方・国政を通じた政治経歴の中で、反骨精神に基づく地道な活動を貫いた政治家であった。2008年10月25日、脳梗塞の後遺症で青森市内の病院で死去、享年84歳であった⁽²⁸⁾。

かつて、旧青森第二区で激しく選挙戦を闘った、津島雄二・衆議院議員

は、関の訃報を聞いて、「自民党と社会党が競っていた時代の良きライバルだった」と評し、その上で「自分の信念に忠実な方で、お互い随分激しい議論をしたが、不快感は残らなかった。互いに尊敬していた。心から御冥福をお祈りする」と述べた⁽²⁹⁾。

② 教員・日教組

関晴正の父・晴四朗は、西郡十三村（現・北郡市浦村）の出身で、青森師範を卒業、教員、県視学、総務課長、青森視学、助役を務めた。父は、息子の晴正に「空襲を受け、焼けた青森で教育復興に尽くせ」と諭したものの、晴正の方は「へき地教育をやりたい」として六ヶ所村倉内小学校に赴任した⁽³⁰⁾。

関は、「子どもたちのために努力しているのに、なぜイモガユをすすらねばならないか」こんな思いから、教育改善、教員の地位向上をめざし、組合活動に飛び込んでいった。そして、青森師範時代の仲間を集めて県教育同志会をつくり、1947年6月に結成された日教組の中央委員に1951年まで四期連続して選出された。この間に、勤務先は倉内小から野辺地小を経て青森市浪打小、野脇小へと移っている。

関は、1949年4月、青森市教組書記長に、翌1950年4月には、県教組執行委員（文化部長）に就任、次第に組合活動にのめり込んでいった。関は、「オレは労働者ではなく教師という聖職者だ」と吐露していた⁽³¹⁾。

③ 市会議員・県会議員

関は労組で活動する一方で、政治家としての道を進む決意をする。青森市教組の推薦を受けて、1951年4月の市会議員選挙に無所属で出馬、定数36名に、何と134人が立候補した。だが、関は602票を獲得し、20位で見事に当選した。晴正27歳の時で、当時最年少市議であった⁽³²⁾。関は市会議員に当選するや、教育常任委員会に所属、1955年4月の市議会選でも再選

された。

関は次に、1959年4月の統一地方選において、県議選に転出する。社会党が県議三期の佐藤義男を青森市長選に立てたので、社会党県議が空席となったのだ。青森市選挙区は定数7名に対して、13人が立候補、関は新人ながら8,994票を獲得して、第三位で当選した、関35歳の時である。

県議選では、初出馬ながら、ベテラン勢を相手に戦い見事に議席を得た関は、次のように当選の喜びを語った。「まさか三位になるとは思わなかった。せいぜい七位に食い込めば精いっぱいだ、と思っていた。まったくユメともいった感慨です。これはただ私を推薦してくれた労農団体の組織の力です。…協力して県政のためにつくしたい」⁽³³⁾。

県会議員時代のエピソードを一つ紹介しておく。1962年3月、県議会の第69回定例会が開催され、東北開発会社の汚職が問題となり、関晴正県議は、青森県開発関係の開発センター代理店設置、砂糖事業の鉦区買収を取り上げて、山崎岩男知事の責任を鋭く追及した。開発会社は無関係であることが判明したものの、これが一つの刺激となって、山崎知事は3月23日、胃潰瘍で倒れて胃の切除を行うはめとなった。これが契機で翌年、山崎知事は辞表することになる⁽³⁴⁾。

関は、県会議員を1959年から1971年まで12年間務めあげた。社会党の先輩議員で後に衆議院議員となる米内山義一郎は、関のことを「問題意識もしっかりしているし、頭も切れた。若い手県議の中では光る存在だった」、と高く評価している⁽³⁵⁾。

④ 衆議院議員

既述のように、関晴正は、27歳で市会議員に、そして35歳で県会議員という具合に、出世街道を歩んできた。そこで、出来ることなら、県議を三期で卒業し、40代で国政にと夢みていた。しかし、青森県は保守王国であって、社会党員の出番は少なかった。しかも青森旧第一区には、先輩の

淡谷悠蔵と米内山義一郎が腰を据えていた。

だがその後、社会党の低落傾向が続き、青森旧第一区で共倒れとなり、衆議院議員が不在となった。そこで、関にお鉢が回り、1979年10月の衆議院・総選挙に出馬、7万2,556票を獲得、第三位で当選した。関は、56歳にして念願の衆議院議員となったのだ。関の当選により、社会党はようやく一議席を奪回することに成功した⁽³⁶⁾。

地元の東奥日報紙は、関が初当選した背景を次のように報道している。「前回共倒れの苦杯をなめた社会党は関一人に絞り、議席を奪回“社会党ゼロ県”の不名誉からようやく脱却した。党内に油断とゆるみがあり出遅れたこと、社会党特有の関個人に対する党内批判があったこと、米内山離党問題で党内が乱れたこと一などあらゆるウミが噴き出し、中盤まで当選が危ぶまれていたが、終盤になり、各単組がフル回転、増税問題に対する批判票を引きつけ、ゴダゴタを一気に解消した」⁽³⁷⁾。

当選した関は、「本当にありがとう。これは私の勝利ではなく、社会党の議席を確保しようという県民の願いが実ったものだ。……社党のもっている強さを広げ、労働者、農漁民、市民の声を国会に反映させ、闘いを前進させたい」と抱負を述べた⁽³⁸⁾。

関はその後、1980年6月および1983年12月の衆議院・総選挙で二回にわたり連続当選した。1986年7月の衆議院・総選挙の時は、落選したものの、1990年2月の総選挙ではトップで返り咲き、通算すると、衆議院議員を四期務めた。この間、国会では、関は反核燃運動の立場から、原発からでる放射性的廃棄物処理、核燃料のサイクル基地問題、および三沢の米軍基地の危険性などで政府を鋭く追及、県民の安全のための立場を鮮明にした⁽³⁹⁾。

図表④は、関が衆議院総選挙で獲得した票数と順位を示したものである。なお、1993年の総選挙の時に関は出馬せず、社会党青森県本部執行委員長の今村修に議席を譲った。

図表④ 関晴正の衆議院総選挙での得票と順位

年度	得票数	順位
1980年	7万7,580票	3位
1983年	9万2,083票	3位
1986年	8万4,073票	5位(落選)
1990年	16万1,579票	1位

出典：木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員総選挙』〔北方新社，1989年〕。

⑤ 政治家「関晴正」

関晴正は、青森市議、青森市長、青森県議、知事選、衆議院選、および参議院選と実に多くの選挙に出馬し、その議員歴は30年の長期にわたっており、革新勢力を代表して政策と信念を曲げずに、訴え続けてきた政治家である。

関の政治家としての最大の転機は、1996年、社会党が社民党に移行した時であろう。関はこの時、「社会党の魂を捨てるものだ」と反発、護憲を旗印にした新社会党に参画している。その際、関は「護憲という骨が抜け、クラゲようになってしまった社民党よ、さらば。憲法9条の理念を高く掲げ、プラトニウム利用に断固反対、平和な民主主義社会を実現するために引き続き活動していく」と宣言している⁽⁴⁰⁾。

関は、終始一貫して反核、反戦、平和運動に携わり、自らの信念を曲げることなく、護憲の立場を貫いた、いわば信念、気概の人であった、とあってよい。関の口癖は「小粒でもぴりりと辛く」であり、たとえ組織が小さくても、大きなものに立ち向かっていく。すぐにはかなわなくとも立ち向かっていった⁽⁴¹⁾。

渡辺英彦・社民党県連代表は、反骨精神を貫いた関を評して、「旧社会党の本県を代表する政治家だ。理論的に与党を追及し、若い人を励ます人だった。非常に大きな存在だったので残念だ」と語っている⁽⁴²⁾。

関晴正が、政治家として最大に偉いところは、護憲運動もさることなが

ら、1990年の総選挙で16万票余りを獲得し、次の1993年の総選挙でも十分当選可能だったのに出馬を辞退し、後継者として今村修・書記長に議席を譲り渡したことだ。そこに、関の政治家としての決断と勇気を感じる。関は70歳に達していた。

4. おわりに

本章で取り上げた政治家は自民党の津島雄二と社会党の関晴正である。前者は東大→大蔵省を歩み、津島家の看板を背負って、衆議院議員となり、厚生大臣を二度も務めあげたいわば、「超エリート」である。津島は、青森県には直接縁がなかったものの、妻の園子が太宰治の長女であったので、津島家という閥閥を最大限生かした政治家である。引退した雄二の地盤は、息子の淳が引き継いでいる。

一方、関は青森師範を出て、小学校教師となり、組合運動をバックにのし上がってきた、いわば下からの「這い上がり組み」の代表である。関は市議、県議、そして衆議院議員と一歩一歩ずつ経験を積み、その上で護憲運動を展開してきた本県の革新勢力を代表する政治家である。

両者は、青森旧第一区、特に青森市を中心に、一方は保守勢力、他方は革新勢力を代表して激しく総選挙を闘ってきた。両者に共通しているのは信念の強さと同時に、政治家としての引き際の清さである。政治家を津島は79歳、関は70歳で引退した。高年齢の上での引退であったとはいえ、これまで本県出身の衆議院議員、参議院議員は、最後まで議席に執着して敗退・引退に追い込まれたケースが少なくなかった。それだけに、後継者を準備しての(?)引退は際立っている、といわねばならない。

〈注〉

(1) 『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、960頁。

(2) 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロン協会出

- 版部, 1983年], 44頁。
- (3) 『東奥日報』2009年7月20日。
 - (4) 前掲書, 『青森県人名事典』, 924頁, 『青森県人材・人物情報リスト 2007年』〔日外アソシエーツ, 2006年〕, 173頁。
 - (5) 「関晴正氏が死去」『東奥日報』2008年10月27日。
 - (6) 前掲書, 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』, 44~46頁。
 - (7) 『東奥日報』2009年7月20日。
 - (8) 津島がパリに派遣されたのは, 当時 EC (欧州共同体) が採用しようとしていた, 付加価値税の勉強のためである (前掲書, 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』, 44頁)。
 - (9) 同上, 『風雪の人脈 第一部・政界編』, 44~49頁。
 - (10) 同上, 48~49頁。
 - (11) 「県民の審判顧みて一記者座談会」『東奥日報』1976年12月6日。
 - (12) 前掲書, 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』, 49頁。
 - (13) 「当 県民の審判かみしめて 落」『東奥日報』1976年12月5日。
 - (14) 同上。
 - (15) 前掲書, 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』, 49頁。
 - (16) 「津島雄二氏 不出馬一衆院選本県一区」『東奥日報』2009年7月20日。
 - (17) 同上。
 - (18) 「津島さん笑顔 “満開」『東奥日報』1990年2月28日。
 - (19) 「第二次森内閣 閣僚の横顔」『東奥日報』2000年7月7日。
 - (20) 「津島厚相に聞く一介護保険を円滑に」, 同上。
 - (21) 「津島雄二」前掲書『青森県人物・人材情報リスト 2007年』, 208頁。
 - (22) 『週刊文春』2009年7月30日号を参照。
 - (23) 前掲書「津島雄二氏 不出馬」『東奥日報』2009年7月20日。
 - (24) 政治学者の木村良一は, 世襲候補を次のように皮肉っている。「今回, 第46回総選挙は自民党にとって政権奪取の選挙であり, 勝てる候補であれば世襲であれ公認候補として認めての選挙戦であった。津島 (淳) 候補は, 見事に当選した。幼少のころから東京の学校に通い, 青森県には同級生もなく友人も少なかったであろうが, 世襲候補であるが故に当選を果たしたのである」(木村良一「第46回衆議院議員総選挙・2012年(平成24年)12月16日実施一民党政権の野田 “近いうち解散” 選挙による自民党政権復帰」『青森中央学院大学研究紀要』第21号(2013年9月), 70~71頁)。
 - (25) 「元衆院議員の関晴正氏が死去」『陸奥新報』2008年10月27日。
 - (26) 「関晴正氏が死去」『東奥日報』2008年10月27日。
 - (27) 同上。
 - (28) 「評伝貫いた反骨精神」同上, 20面。

- (29) 同上。
- (30) 前掲書、朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』、71～72頁。
- (31) 同上。
- (32) 同上。
- (33) 『東奥日報』1959年4月24日。
- (34) 山崎知事の病名は表向き胃潰瘍となっていたが、実際には、「門脈圧高血圧症」であった（『東奥年鑑 昭和37年版』〔東奥日報社、1962年〕、38頁、藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、111頁、487頁）。
- (35) 前掲書、朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』、75頁。
- (36) 同上、76頁。
- (37) 『東奥日報』1979年10月8日。
- (38) 同上、13面。
- (39) 例えば、第194国会、1986年4月17日の衆議院本会議での関晴正の発言などを参照されたい（kokkai.sugawarataku.net/giin/hhr01684.html）。
- (40) 前掲書「評伝一貫いた反骨精神」『東奥日報』2008年10月27日、20面、関はまた、「叙勲制度は明治憲法下の太政官布告に基づいており、新憲法にそぐわない」として数回にわたり叙勲を辞退している（同上）。
- (41) 同上。
- (42) 前掲書、「元衆院議員の関晴正氏が死去」『陸奥新報』2008年10月27日。

*参考文献

- ・朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部、1983年〕。
- ・『青森県人材・人物情報リスト 2007年』〔日外アソシエーツ、2006年〕。
- ・木村良一「第46回 衆議院議員総選挙・2012年（平成24年）12月16日実施一民主党政権の野田“近いうち解散”選挙による自民党政権復帰」『青森中央学院大学研究紀要』第21号（2013年9月）。
- ・藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕。
- ・『週刊文春』2009年7月30日号。
- ・『東奥日報』。
- ・『陸奥新報』。

※本シリーズは2017年春に『戦後青森県の保守・革新・中道勢力』（志學社）と題して公刊するので、今回をもって終了とする。